森の通信

ウータン

SAVE THE TROPICAL FORESTS

30

HUTAN

1993年12月20日発行

• The Silvered Leaf Monkey.

ウータン・森と生活を考える会

〒530 大阪市北区中崎西1-6-36 サクラビル新館308号「関西市民連合」事務所気付
phone 06-372-1561

【一部】300円
【年会費】3000円(94年から)
【郵便振替】大阪3-3880

PRINTED ON RECYCLED PAPER

『everybody on The 熱帯林！』

地球環境問題がうんぬんされ出してひさしくなるが、世の中ますます機械化、省力化へと流れている。

モノをつくること、モノをつくる人が端に追いやられ消えていってしまう。

子供たちの目もコンピューターとやらに奪われ不況といわれる中でも今だにいい学校へいい企業への道をすすんでいます。

こつこつと自然と向い合ってモノをつくる仕事に目を向けてほしい、又将来そんな仕事についてほしいと子供に望むのは親のエゴでしょうか？

「そんなん食われへんで。もうからんやろ。」と一蹴されるでしょうか？

お金が高い、安いだけで判断される世の中が少しでも変われば良くなっていくんじゃないだろうか。

家具をつくりだして4年、少々自信らしきものはできたが相変らず苦しい生活が続いています。

名人芸、職人芸がこの日本からなくなっていくことに怒りと悲しみをおぼえる。

もう少しモノをつくる人たちが見直されてもいいんじゃないかとつくづく思う今日この頃……。

永田健一 Ⓝ

【ウータン活動報告】

93
9.1 ウータン、八尾市と熱帯林保護の話合い。
9.7 藤井寺市と熱帯林保護の話合い。
9.12 「サラワクの熱帯林とプランテーション」最新報告会開催。報告＊辻村、井下
9.23・26 PHD協会主催の「枝打ち族」に参加。
9.24 貝塚、寝屋川市が「熱帯林保護に向けての取組みについて（以下『取組み』と略）回答。
9.27 吹田、門真、河内長野、松原、豊中市が「取組み」を回答。
10.4 岸和田、大東市が「取組み」を回答。
10.5 高槻、茨木市が「取組み」を回答。
10.8 箕面市も「取組み」を回答。
10.9 東京の「第5回熱帯林保護会議」に参加。
10.15 大阪狭山市が「取組み」を回答。
10.17 トーク&ライブ「森の鼓動」開催。
10.20 出前講座「賠償とODA」民主法律協会で。
10.22 守口市が「取組み」を回答。
10.28 出前講座「サラワクの熱帯林」マンディで。
11.2 富田林市が「取組み」を回答。
11.3 出前講座「熱帯林とアジアの環境破壊」教育合同労組で。
11.8 東大阪市も「取組み」を回答。
11.11 ウータンと神戸NGO協議会が声屋、四宮、宝塚、川西、伊丹、明石、姫路市「熱帯林保護に向けての取組みについて」回答依頼。
11.17 「インドネシアの熱帯林」カリマンタンとイリヤン・ジャヤより来阪し、集会開催。
11.20・21 ウータン合宿。

森の通信

HUTAN 30号 目次

CONTENTS

特集 サラワクとインドネシアの先住民
＊サラワク最悪の緊急事態……4
〔坂元良吾〕
＊インドネシアの森林破壊……8
――先住民を迎えて――
＊トゥアロマ・スパン（93見聞録②）…10
――伐採と闘った村――〔井下祥子〕
＊連載④熱帯林を考える〔猪股栄一〕……17
＊ウータン・アート・ギャラリー〔諸戸美和子〕…23

自治体キャンペーン経過報告……4
＊府下15自治体が削減へ〔西岡良夫〕
＊各地から、各層からの声
＊ストップザ自然破壊をコンセプトにして熱帯林保護に役立つ企業経営を考えています〔谷川宏〕……15
＊Informationコーナー……21
＊ウータンに届いたカンパ、会費、お便り……22

【表紙】新草木染・ハーブ（平和紙業）

『もう木を切らないで』

サラワク最悪の緊急事態

《坂元 良吾》

六月。サラワクのバラム川上流域で行なわれていた、先住民プナン人による伐採反対の道路封鎖現場を訪れた。封鎖現場では道路のド真中に闘争小屋が作られ、遠くは二週間も歩いて加勢しに来る人も含め約二百人が周辺に仮小屋を建て、一貫してブルドーザーとトラックを追い返してきた。

だが生活環境は劣悪なものだった。「来てほしい」との声についていくと、そこには二つの墓があった。封鎖開始以来、伐採で汚された川の水を何カ月も飲むうちに、六人の子供が下痢を起こして死んでいったという。

そうやって死んでいった生後一ヶ月半の赤ん坊の墓の前でその祖母は嘆く。「政府は生活向上のための開発というが、その開発の正体がこれだ。六人の子供がここで死んだ！」

また、封鎖の為だけに作られた仮小屋生活での問題は食料不足だ（プナン人は他の民族と違って殆ど農耕をしない）。栄養不足なのか、両まぶたとも腫れ上がり、目が塞がっている赤ん坊が目だつ。その一人に目薬をさそうと指を両まぶたに置いた途端、目から膿がピュッと勢いよく飛び出てきた。ワッと私は叫ぶ。隣では、発疹で全身真赤になった赤ん坊が母親の乳房に吸い付いている。

このような状況でも、特に老人層はど「森に住めぬのなら死んだほうがましだ！」と、警察の強制排除勧告を恐れず最後まで封鎖を続ける意思を見せていた。

だが十月、サラワク現地からのFAXに、ああやはりかという思いが走った。『九月末、約三百人の軍隊、警察、木材会社の人間がやってきた。警察は群集を催涙弾で散らし、警棒で殴りかかったので、出血し意識を失った人も出た。小屋には火がつけられ、飼っていた猿、鶏、犬も催涙弾で殺された…』

そして、十一人が逮捕されていった。また、この封鎖闘争の指導者のプナン人男性が二万リンギ（約九十万円）の懸賞金と共に警察の指名手配を受け、森の中での逃亡生活を余儀なくされている。さらに、道路封鎖に最も多くの人数が参加していたロング・モボイ村では、軍が村を爆破するとの脅しをかけてから、二十家族がやはり森に逃げ込んでの避難生活を送っているそうだ。

自分の村を離れ、子供が一人また一人と死んでいき、食料不足の中で踏み止まるプナンの人々。その人々の森から運ばれた木材をビルの建材に、家庭の家具に使っては捨てる日本人。私たちはこの問題をどう考えていくのか？

六月、現場を去る時に、杖をついたプナンの老婆が私に切々と訴えた言葉は今も忘れられない。

「この森の木は日本に行っていると聞きました。どうぞ日本政府に伝えて下さい。もう木を切らないでくれと。もう誰も殺さないでくれと。」

下痢で死んだ子ども墓の前で

FROM OSAKA

熱帯木材不使用へむけて 自治体キャンペーン経過報告 ⑫

府下十五自治体が熱帯材削減へ！

（府、大阪市、堺市、豊中市、吹田市、高槻市、箕面市、東大阪市、茨木市、守口市、八尾市、松原市、藤井寺市、泉佐野市、貝塚市）

事務局長　西岡良夫

『八尾、藤井寺市の熱帯材使用削減』

八月四日、私達ウータンは八尾、松原、藤井寺市へ『熱帯林保護の話合いについて』という文書を送付。ウータン事務局と地元の仲間と一緒に、九月一日に八尾市と、九月七日には藤井寺市と話合いをもつことになった。

八尾市は建設次長ほか四名が応対してくれる。次長は「新庁舎の型枠がスラブ、ブロック型枠等を採用し、二五％熱帯木材が削減になります。また、生涯学習センターの建設も削減し、来年度以降も建設時に熱帯材の削減をこころがけます」と発言してくれた。

藤井寺市は新庁舎建設の真っ最中で、特定政策推進室長ほか四名が応対して、室長は「いま工事中で正確に削減率を計算してないが、PC（プレキャスト）工法やから約八割ぐらい熱帯材の使用削減になると思う」とのことだった。

今後も両市に期待したい！

『大阪府十五自治体が削減実施・表明』

次いで八月一六日、私達ウータンは『熱帯林保護に向けた取り組みについて（質問）』を府、大阪市、堺、八尾、藤井寺、松原市を除いた全自治体に送付する。

九月中旬より各自治体から次々と回答が寄せられた。十一月一〇日に最終集計したところ、十三自治体が熱帯材使用削減に取り組み、来年度から実施と表明した自治体が二つあり、十五自治体が削減に取り組むことが判った。

（次頁の表を参照）

ウータン・森と生活を考える会は、九〇年末より大阪府、大阪市と話合いを始め、「熱帯材使用削減を各自治体が取り組んでほしい」との市民の気持ちが伝わったことは大変嬉しいばかりだ。予想外で驚いている。

特に大阪府知事と大阪市長自らが熱帯使用抑制方針を発表され、各自治体に対して『使用抑制』の協力を行なったことと、私達が各自治体へ削減の申入れを何度も行なった事が、十五自治体の「使用削減」につながったのではないか。削減した大阪府等に感謝！

熱帯林保護に向けた取組みについて〔質問〕

大阪府　各自治体首長　様

（略）

「熱帯林保護」に対する施策について

話合いをしていただくよう願うものです。

質問

1．貴自治体は今年度、あるいは来年度に「熱帯木材使用抑制施策」を打ちだされるご予定がありますか。ご予定がある場合は、どのような熱帯木材使用抑制施策で、どのくらいの削減率ですか。また時期はいつ頃からなされるのですか。

2．もし、貴自治体が「熱帯木材使用抑制施策」をお考えになっていないのならば、なぜ取り組みをなされないのですか。具体的な理由をお教え下さい。また、貴自治体は「熱帯林保護」や「地球環境保全」に向けての施策は、どのようなものだとお考えですか。

3．府下熱帯木材使用等関連主務者会議においてお聞きおよびと思いますが、大阪府、大阪市、堺市などの「熱帯木材使用抑制施策」をどのように評価しておられるのですか。

93年8月16日

大阪府下の自治体の熱帯木材使用削減施策状況　1993年11月末

自治体名	熱帯木材使用抑制計画の概要または取組み状況	主担当部課
大阪府	22件のモデル工事を針葉樹複合合板、PC工法、金属型枠、ラス型枠等使用。特記仕様書に複合合板使用の明示。昨年度の熱帯材型枠削減量は全型枠の40%。削減目標75%。	建築部 営繕室
大阪市	9件のモデル工事実施。①業者からの提案工法、②市の指定工法の2通りで、複合合板、ブロック型枠、キーストン型枠、鋼製型枠、ラス型枠、樹脂型枠、断熱材兼用型枠使用。UNEP環境技術センターは日本初の100%非熱帯材。	営繕部 企画課
堺市	3件のモデル工事実施。PC工法、デッキ型枠等使用。1件は市営旭丘住宅55%削減、1件は教育文化センター30%削減、1件は堺商高で17%削減。来年建設予定の市立病院、2支所は100%非熱帯材使用予定。(250000㎡)	建築課 庁舎建設準備室
八尾市	新庁舎の型枠はスラブデッキ、メタルデッキ、ブロック型枠使用で25%削減。生涯学習センターはデッキ、キーストン型枠等使用で20%削減。来年度建築物も削減予定。	建設部
藤井寺市	新庁舎をPC工法等採用。削減率は集計中。92年9月議会で「熱帯林材の保全に関する意見書」採択。	特定政策推進室等
松原市	新庁舎の型枠を複合合板等使用。削減率は17%。	庁舎整備室
吹田市	塗装合板、複合合板使用で93年度削減率は約50%。「熱帯木材の使用抑制に関する基本方針」を策定して、建設業界に抑制を呼び掛け。特記仕様書に塗装、複合合板使用を明記。(6000㎡)	建築課 技官
高槻市	2件のモデル工事実施。1件は芥川小学校で35%、1件は老人福祉センター。ラス、スレート型枠、複合合板使用。	建築課
豊中市	92年3月末に「熱帯林の保全に関する要望決議」採択し、複合合板等の使用を始める。今年の削減率予定は全使用量の約30%。(70000㎡)	建築部
箕面市	大規模工事発注時、93年から熱帯材削減を業者に通達。	建築課
大阪狭山市	FP板、FRP板、塗装合板使用を始めた。削減率不明。	建築課
守口市	今年度着工のシルバー人材センターは、複合合板、PC工法で90%以上削減予定。今後も業者に抑制の指導を図る。	建築課
東大阪市	今年着工の八戸の里スポーツランドは熱帯材抑制した設計。	建築課
貝塚市	来年度から針葉樹複合合板使用予定。工法、使用方法等を調査検討しながら熱帯材使用抑制に努める。	建築課
茨木市	府、大阪市等の施策について一定の効果があると考えられる為、複合合板使用を指示予定。	土木部 建築課
検討中		
岸和田市	府、大阪市等の抑制計画を評価し、現在内部で協議中。	環境保全課
四条畷市	複合合板、金属型枠使用を大阪府等を参考に、現在検討中。	秘書課
寝屋川市	府、大阪市等の実施や府下自治体の方針を参考に、検討中。	環境保全課
大東市	国、府の指導で対処していきたい。	広報公聴課
門真市	国、府の動向で対応策を検討したい。	企画課
河内長野市	府下の自治体の取組み事例を参考に、検討したい。	企画課
富田林市	府建設工事基準に準じ、鋼製型枠、工場製品使用を検討中。	建築課等

＊その他の自治体は未回答　　（　）は昨年度の型枠使用量

削減

来年から

『今後、私達の望むものは…』

当初「三年で府、大阪市等の削減を、五年間で三〇%ほどの自治体が削減してくれたら…」と考えていたが、すでに三分の一の自治体が「使用削減」となって、びっくり!!

また私達が申し入れていた通り、府は順次削減率を増やし、特記仕様書を明記してくれて、大阪市はUNEPの環境技術センター建設を一〇〇%非熱帯木材使用としてくれた。

府、大阪市、堺市はすでに「使用抑制」の方針を出して、年ごとに使用削減を進められ、その他の自治体も同様で、今後多数の自治体で「使用抑制」

が進むと思われる。それは大阪府、大阪市の担当者が「代替の型枠も大きな支障がない」と言うことと、熱帯木材最輸出地のサラワク、サバ材が枯渇し、今後熱帯木材の高騰が続いて入手困難になると予想される。またサラワク奥地で伐採が続き、先住民は森を奪われている。この事態を解消するために、各自治体に以下の点を検討してほしいのです。

①「熱帯材使用抑制」方針策定と、特記仕様書への削減材の明記
②削減目標の設定と削減への予算化
③自治体独自の建築工法の検討
④建築担当部局等での検討会議の設置
⑤打ち放し型枠、足場材の見直し
⑥高層建築へ高耐久度のPC工法導入
⑦使用済み木材の再資源化の検討

などが必要と思われる。

今後、ウータン・森と生活を考える会としては、さらに自治体キャンペーンを拡げるために建築家、弁護士、学者、議員、市民団体と一緒に「削減のための検討委員会」を作っていこうと考えている。

各地から、各層からの声

ありがとう

＊畑健次郎さん〔東大阪共同購入会〕

名前だけのメンバーだけど、たまたま住民なので八尾市との話合いに同席させてもらいました。ウータンの皆さんの熱意と知識とハッタリ（？）に学ぶことばかり。この問題では八尾市も頑張っているようですネ。

＊江藤憲子さん〔吹田市議〕

公害対策運営審議会の席上で発表された「平成四年度吹田市の酸性雨」は、四四回の降雨調査の中で四二回もありました。吹田市の公害は悪化の一途を辿っています。

この美しい地球を次の世代に渡すために、熱帯材の大幅な削減は私達の緊急な課題です。

＊二木洋子（フタギ）さん〔高槻市議〕

今、地方自治体に問われているのは、地球規模の環境汚染をも視野にいれた環境政策です。「緑の保全」というのなら、地域林業の振興に取組むと共に、公共事業での熱帯材使用削減は自治体の責務だと思います。

＊伊藤哲男さん〔茨木市民〕

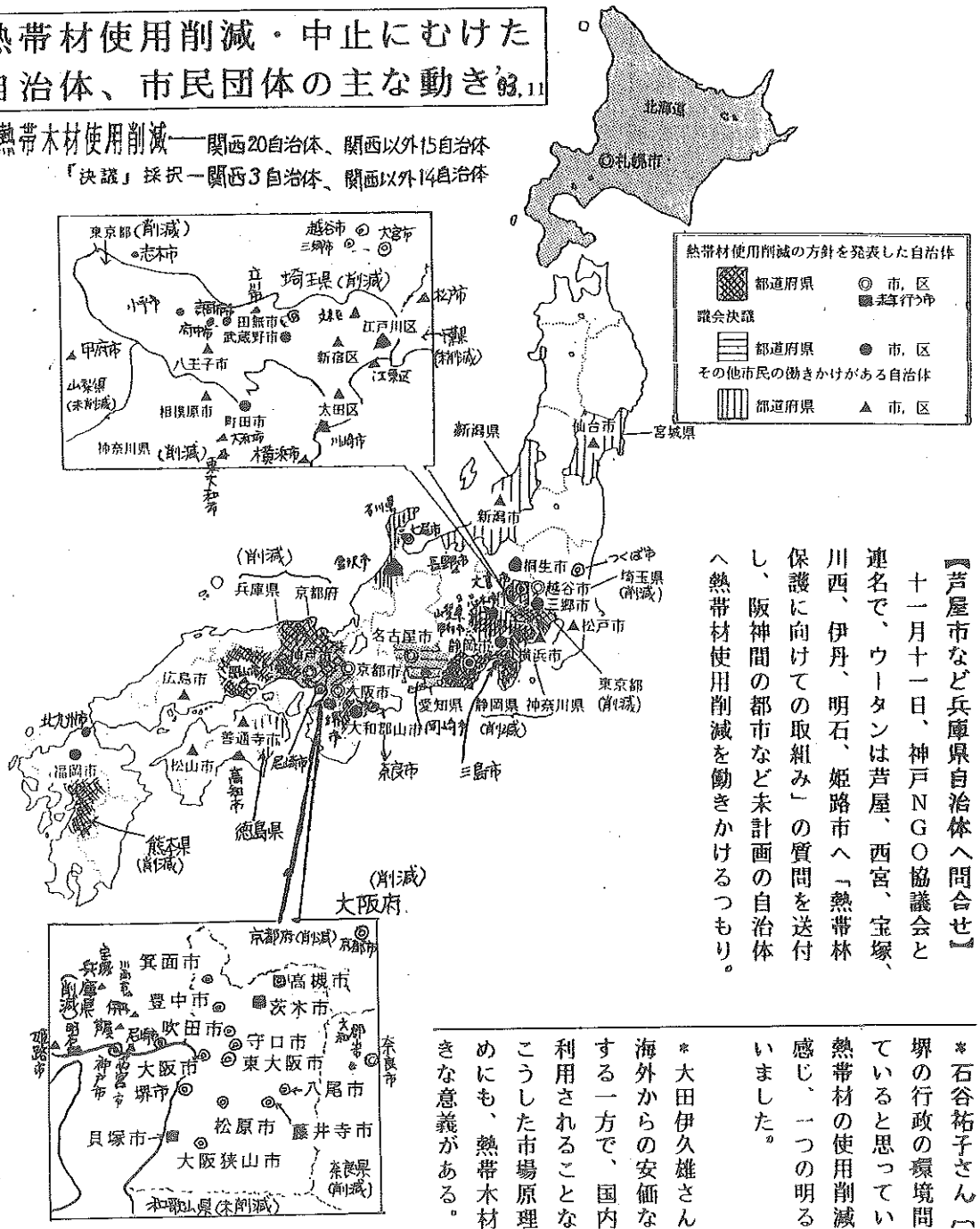
熱帯材抑制に一歩踏みだした高槻・茨木両市。一方、廃材として山積みされた使用後の熱帯材と、両市山間部の大規模開発という未曾有の破壊行為が両市の市政をよく表している。運動の幅を拡げなければ！！！。

＊菅家（カンケ）克子さん〔建築家〕

現在、環境問題について建築家の中で話合いをしているところです。熱帯材をやめて針葉樹材の輸入というのも、いずれは問題が起きるでしょう。すぐに熱帯材に変える代替品は難しいかもしれませんが、建築物を長持ちさせる発想が必要！　繰り返して使えて、しかもそれが循環システムに乗る材料を開発する必要があるのではないでしょうか。

熱帯材使用削減・中止にむけた自治体、市民団体の主な動き'93.11

熱帯木材使用削減――関西20自治体、関西以外15自治体
「決議」採択――関西3自治体、関西以外14自治体



『芦屋市など兵庫県自治体へ問合せ』

十一月十一日、神戸NGO協議会と連名で、ウータンは芦屋、西宮、宝塚、川西、伊丹、明石、姫路市へ「熱帯林保護に向けての取組み」の質問を送付し、阪神間の都市など未計画の自治体へ熱帯材使用削減を働きかけるつもり。

＊石谷祐子さん〔ドゥー・ツギャザー〕

堺の行政の環境問題政策は大変遅れていると思っていました。しかし最近、熱帯材の使用削減交渉では歩みよりを感じ、一つの明るい展望が開けたと思いました。

＊大田伊久雄さん〔京都大農学部教官〕

海外からの安価な木材を大量に消費する一方で、国内の森林資源は有効に利用されることなく放置されている。こうした市場原理の欠陥を補正するためにも、熱帯木材使用削減運動には大きな意義がある。

93.10.15 朝日新聞

熱帯材の使用削減

箕面、守口、東大阪、大阪狭山市も削減へ

「森・考える会」調べ

府内では、まず大阪市が九二年一月に、次いで府が同年二月に、さらに堺市が同年六月に相次いで削減の方針を打ち出した。その後、八尾、藤井寺、松原、吹田、高槻、豊中の各市がすでに取り組みを始めており、貝塚と茨木両市が来年度以降に予定している、という。

～カリマンタン・イリヤンジャヤ～

インドネシアの森林破壊

――先住民を迎えて――

11月17日夕刻、インドネシアから3人の先住民を迎えての報告会が行われた。3人の内、2人はサラワクの南、同じボルネオ島のカリマンタンから。もう1人はイリヤンジャヤから、それぞれインドネシアの森の現状を以下の様に訴えた。

ダマンさん。カリマンタンで先住民族・ダヤクの研究所で働く。20代の若いダマンさんは、先住民の抱える（先住民がしょいこまされている）問題を解決する為に、カリマンタンの状況をこう話した。

「かつてインドネシアを支配していたオランダ人は『ダヤクの運命とは外から来る者によって決められるであろう』と言いました。その状況が現在も尚続いています。」

カリマンタン人口の約30％、三百万人のダヤク・先住民族が、自らの住む森に対して自己決定を規制されている現状が、この言葉から見て取れる。

「森や大地は売買の対象にならず、守り育むものである。」自らも先住民たるダマンさんは、先住民の自然観をこう言い表す。

70年から80年の原生林消滅率は、900万ha。カリマンタンでは森林の約8割が伐採されており、昔から森に依存している先住民の生活がいかに困難かが、この数字からも窺える。

「東カリマンタンでは毎月1万から5万㎥の木材が盗まれています。」森林資源の枯渇が心配されているインドネシアは85年から原木輸出を禁じ、合板等の加工木材に力を入れている。「カリマンタンからジャワへと向かう木の90％が、こういった盗まれた木なのです。」

「もう一つ、プランテーションの問題があります。プランテーションは本来、痩せた土地を開発する、と法律で定められているにもかかわらず、数十万haもの先住民の森が開発されています。東カリマンタンでは先住民のお墓までがプランテーションになってしまいました。樹を切り、売って儲け、そして又その肥えた土地を使ってプランテーションで儲ける。如何に法律がないがしろにされているか・・・」

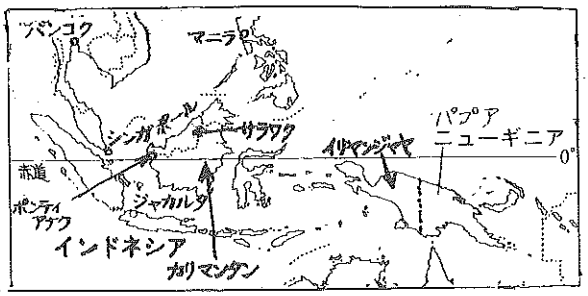
彼が特に指摘し、繰り返して言うのは、「法律が守られていない」という点。不法伐採や盗木が、先住民の生活をいかに脅かしているか、その木材を買う私たち日本人も、もっと考えねばなるまい。

同じくカリマンタンから来たサクンガさんは、先住民の村の村長だ。

「42万haの森が私たちの村です。森には入会地と耕作地があります。森があるから鳥も育ち、狩りや漁に行ける。先祖代々、森は共通の財産でした。きれいな水で水浴びをし、薬も森から恵まれていました。農耕もしますが、それは自然のサイクルに合わせた利用法で、土地の浸食や疲弊を防いでいました。泉や水源等、聖なる土地として守られている場所があり、そこを不用意に伐採しない事によって、魚や獣たちが守られていました。土地の利用についても村人みんなで話し合い、決定してゆく。そういう暮らしでした。

村に6つの会社が、森林伐採権・開発権を持ってやって来ました。畑が作れなくなり、ハチミツの木、薬の木も無くなりました。水が汚れ、信仰の対象が失われました。獣も居なくなりました。という事は、蛋白源が摂れない、食事の内容が悪くなったという事です。

土地の権利自体が奪われました。国有地あるいは開発地という名義変えが行われてしまったからです。森は産業用の林となっ



▲(写真) インドネシアの先住民からの報告
11・17「インドネシアの熱帯林」

てしまった。先住民の森林利用が無理になってしまい、切ったら植えるという事もなされていません。

伐採会社等が入る事によって、町から娯楽産業が入って来ました。お酒、博打、お金に基づく結婚などです。伐採の終わった土地から会社が離れると、男たちも居なくなり、女と子どもが置いてゆかれます・・・・。」

サクンガさんは、支援と連帯を訴えて、話をしめくくった。

インドネシアの最東端、イリヤンジャヤからやって来たマルティンさんは、ニューギニア島の歴史の話から始めた。

「第一次世界大戦後、西半分はオランダの、東半分はイギリスの支配に置かれていました。先の大戦では日本が占領しました。戦後、63年にインドネシアの統治下に置かれ、69年の住民投票で正式にインドネシアとなりました（東半分は現パプアニューギニア）。300の先住民族が住んでいます。

島には600以上の樹・植物が生息し、その内半分以上が売り物になっています。」

「91年1年間で130万㎥の木材が切り出されました。これは、83年から90年まで毎年33万㎥でしたから、一挙に4倍になった計算です。その収入は約90万米ドルですが、地元へ還元される様子は見られません。」

「先住民タジャ民族の人々の話しでは、かつて森から恵まれた百種類もの薬の利用法を知っていたのが、最近では殆ど使えなくなった。そして全般的に作物も弱く、小さくなったと言います。」

「政府が再植林するのは、先住民の土地です。しかし、先住民は自分の土地が失われると思い、それらを引っこ抜くのです。今年（93年）の10月、2人の青年が再生林の木を引き抜きました。ところが2人は捕まり、伐採会社の詰め所に連れて行かれました。会社には軍人が詰めており、2人は軍人から大変ひどい暴行を受けたそうです。」

「皆さんに知っていただきたいのは、先に話した2人の話も含めて、現地でこういう状況にある、という事です。そして木材の約3分の1は日本向けであり、日本は最大の輸入国だという事です。」

マルティンさんは続けて、伝える事が出来て嬉しい、そして「熱帯林を傷つける事は自分を傷つける事だ。」と話を終えた。

日本人が日本を見つめ直す事無しには、熱帯林の破壊を止められない。しかもすぐ行動を起こさなければ、森は無くなってしまう。「自分を傷つけない」為の行動が今、先住民たちから問われている。（文責・風）

REPORT

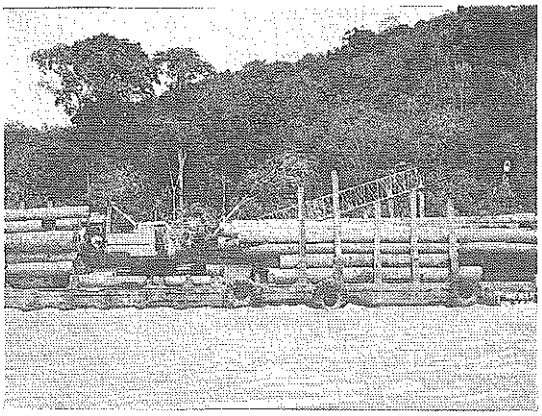
トウアロマ・スバン

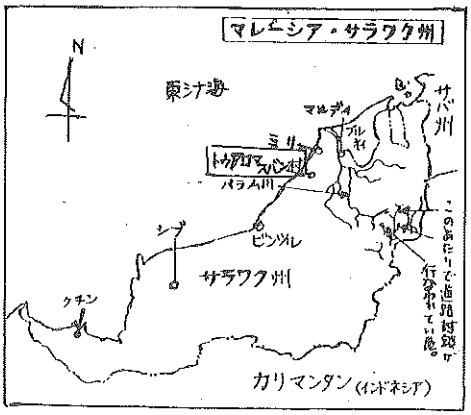
夏・サラワク見聞録②

伐採と闘った村

井下祥子

◀（写真）伐採した木材を運ぶ





「サンガン川をのぼる」

「サラワクにドロボウはいませんから、荷物は船においといて大丈夫です！」

案内のSさんはそういうと、さっさと食堂へむかう。我々もぞろぞろついていく。

マレーシアの多くの食堂と同じく、タタウの船着き場も中華料理店だ。食堂のTVでは、日本のアイドルみたいな中華系（？）の兄さんたちが、日本と変わらない振付でおどっている。

やれやれ、文化の画一化は、ここにも押し寄せている。

この辺の川幅は広く、子供を乗せた先住民の船がゆきかう。通学の子もいるのだろう。水は茶色く濁り、魚もみえない。

サラワクで毎朝のむ「ミロ」と同じ色なので、先住民は「伐採会社はわれわれにミロをくれた」と皮肉をいう。

出発だ。屋根付きフェリーは、40人ほど乗れそうだ。一番前にテレビがあり、プロレスやアメリカのアクション映画をやっている。

日本人だけは喜んで舳先にでたり、屋根に登ったりする。両岸の緑は濃い。

小さい頃からあこがれた「ジャングル」だ！

両岸のところどころにロングハウス（長屋）が見える。長いものは百メートルを越えるだろう。家の周囲には、バナナや色鮮やかな花が植えてある。そして、簡単な船着き場まで、一本の木を削ってつくった階段がのびている。

木製が多いが、赤茶けたトタン屋根もあれば、きれいな色の、レンガのような壁のロングハウスもある。「熱帯林ってなんだ」という本に、「建材であるアイアンウッドが伐採されてレンガやコンクリートで建てるところもある」とあった。ここではどうなのだろ

う。

船は、ロングハウスに近づくと、スピードを落とす。乗りそうな人が立っていれば、船を寄せる。川が交通路のここでは、路線バスと同じ役割だ。

ロングハウスから少し離れたところに、緑の円柱みたいな木が何本もかたまって植えられている。換金作物のコショウだ。

Sさんが「あれ」と指さす。

伐採された木の貯木場だ。水際の土地をきりひらき、何十本もの木を積み上げてある。

川上から伐採した木を運搬する、巨大な船と二度すれちがった。ビデオやスライドでよくみる、イカダに組んで運ぶやり方ではなく、平らな船体に木材とクレーン車を積んで、川をくだっていく。

サンガンバザールという船着き場で下船。

細長いボートが迎えにきている。今日からお世話になるトゥアロマ・スバンの人たちだ。

細長いボートの舳先に、オールを持った舵取りが座り、最後尾にエンジン係、そしてわれわれ六人は間に一列に座る。

川は細くなり、蛇行をくりかえす。右に、左に、ジャングルがひらいては閉じ、新しい景色があらわれる。

うっそうと茂る木々、水面まで垂れ下がるツタ、おおきなコウモリランや、寄生植物が幹に生い茂る。

日本の急流とちがって、平らな土地をゆったりと流れる川は、交通路にむいている。昔はすべて手で漕いだろう。

あいにくの雨。あきらめて、カメラをしまう。

［トゥアロマ・スバン］

ここは、イバン人の村（といっても、ひとつのロングハウス）だ。

あまり大きくないロングハウスだ。前面は、ひとつながりのオープンスペースで後ろに六つのドアがある。ドアのむこうが、それぞれの家族の独立した住まいだ。

床・壁・天井とも、黒ずんだ板材でできている。高床式だが、かっちりした踏み心地だ。二階（天井裏）は、米や籠など日用品の倉庫になっている。

犬や猫は、「可愛がられている」とは言い難いが、家に出入りし、床下には豚や家禽が歩き回っている。

イバンの人々は、にこにこと、しかしとりたてて大騒ぎをするでもなく、私たちを迎えてくれた。とくにガイジンが来たという緊張感はない。「よそ行きの顔」や相手によって態度が変わることはないそうだ。（Sさん）

通訳のイバン女性、Rさんによれば、以前に二回ほど、この村に日本人を案内した、とのこと。ヨーロッパ人も案内したが、「白人はめだつので、当局に見つからないように行くのが難しい」とのこと。

最初、このロングハウスの上流の村もたずねて、そこでも泊まる予定だっ

たが、川の水が少なくて、移動に時間がかかりすぎるため断念。このトゥアロマ・スバンのJさん宅に三日間ホームステイすることになった。

ここに住んでいるのは、主に子持ちの夫婦と高齢者だ。若者は大抵街へ働きにいって、六月一日のガワイ（収穫祭）とクリスマスしか戻ってこない、とのこと。

Jさんの家も、奥さんと、十代のお兄ちゃん、それに、九才か十才かはっきりしない少女だけで、上の子たちは街へでているそうだ。

いつもいっしょにいる4才くらいの男の子は、いとこらしい。大きい子も幼児もおとなしい中で、この子は活発なおどけものだ。アルミの袋の切れ端を棒につけてプロペラを作ってしまったり、捕まえた小さなセミを、耳や鼻の穴にさしこんで見せたり、とにかくいつもなにかやっている。

この子も含め、子供たちは、「よい子」という感じだ。手を焼かせたりやかましかったりしない。「あそぼう」と朝からやってきても、こちらが忙しそうだと無理にねだらない。

幼児でもぐずったりすると、親やおばあちゃんが厳しくしかる。が、手をあげるのは一度も見なかった。Jさんの娘Aちゃんは、洗濯係など、かなりの働き手だ。つい、日本の子どもと較べてしまう。

夕食後やそれ以外の時でも、多くの人がオープンスペースにでて座っている。

私たちが行ったので、毎夜車座の宴会があったが、それ以外は、一応自分のドアの前がテリトリーのようだ。

なにをするでもなく、じっと座っている人、赤ちゃんをあやしている若夫婦（男の人もよく子供の面倒をみる）、しゃべり、笑う人。

大学生のFくんは、すっかり気に入られ、ハナ肇のような風貌のJさんとダンスをおどったり、おばあちゃんに「うちへおいで」と招かれたり。深夜まで酒盛りにつきあっていた。

二人のおばあちゃんは、せっせと籠やマットを編んでいる。材料は、森のラタンなどの植物の皮だ。時代劇の百姓のかぶっているような笠は、シュロに似た葉を編んで作る。

にこにこしているおばあちゃんの手をさわらせてもらった。硬い繊維を扱っているのに、やわらかい。

できたものは、自家用だけでなく、近くのロングハウスにも売れるとのこと。写真を撮っていたら、「ほら」とミニチュアの籠と箕がでてきた。ミヤゲ用らしい。

こういう手仕事は、高齢者だけのものかと思ったら、上流の村では、若い娘さんがやっていた。Jさんの奥さんも自分で編んだ背負い籠を使っている。

食器と服以外は、ほとんどの日用品や農具が森から採ったものでつくられている。

「伐採跡地を見に行く」

えっ、ほんとに見にいくの？ヒルにくわれて歩くんだよ！」とSさん。

一人ずつに決心を確かめる。ここまで

来て、見ずに帰れよか。

一同、虫よけスプレーをかけたり、石けんを足に塗りつけたりして、ヒル対策に励む。もっとも、細い川を歩いて渡ったりしたので、無駄な抵抗だった。

ジャングルの中はひんやりしている。日本のように下ばえ草や低木が密生していないので、「やぶ漕ぎ」という感じではない。途中までは人の踏み跡もついている。

が、トゲの鋭い植物がある。ラタンなどは、大きなトゲだらけだ。一昨日の雨に地面はぬかるみ、気をつけて歩いても、泥に足をとられる。

戦時中、森をさまよった日本兵は、さぞ消耗したろう。

一行のなかにも、「父が兵隊でサラワクに終戦までいた」という人がいる。

べつのロングハウスでは、「戦争のときにロングハウスを焼いた元日本兵たちが、毎年おわびに来る」という話を聞いた。

Aちゃんは、ゴムゾウリでひょいひょい身軽に歩いていく。はいているトレーナーは、日本の中古衣料らしい。名札に組と名前が書いてある。

途中で、巨大な板根に出会う。熱帯の土壌が薄いため、倒れるのを防ごうと木が発達させたといわれる。サラワクに何度も来ているSさんも、こんなに大きいものは初めてとのこと。

途中の空地で休憩。

なんと、おじいちゃん、おばあちゃんが勢揃い。いつのまに、ここまで来たのだろう？ゴザやカゴの材料をたくさん集めて、切りそろえたり掃除している。

サラワクの老人は元気だ。もっとも思っているより若いかもしれない。「年をきいても、はっきりしないだろう」と、最初から尋ねなかったので、よくわからない。

一時間半も歩いたか、やっとのことで、明るい、ひらけた場所に出た。

ここが、村に一番近い伐採跡地だ。

灌木のあいだに、大きな切り株がある。せっかく伐採したのに、中が穴空きだったので、そのまま放置されている。

木のそばから、急斜面をずうっと下って、森の中へと道が続いている。ブルドーザーの跡だ。よくもこんな急斜面を登ってきた、とあきれる。

ここの地面は硬くて黄土色だ。

森の土は、柔らかでこげ茶色をしていた。切り開かれた斜面から、雨が土壌を押し流してしまったのだ。

一同、仲よく一匹ずつヒルに喰われていた。

帰り道、枝を利用した、簡単なはね罠が十個以上つくられていた。来るときに出会った、銃を持った先住民男性が仕掛けたものだ。

少し大型の、きれいな鳥が一羽かかっていた。もう少し大きめの罠は、シカなどを獲るのに使うそうだ。

滞在中見かけた脊椎動物は、大型のリスとツパイ、カワセミ2種、それに

この鳥だけだった。以前は、サラワクの象徴であるサイチョウが沢山いたということだが……。

サラワクの動物の写真集を子供や男性に見てもらったが、同じテナガザルでも種類を識別している。

「メガネザルは以前はたくさんいたが、今はすくない。ロリスはいる」といった話を聞いた。

後30分歩けばロングハウス、という所で、「食事にしよう」と、いきなり大きなソテツの葉のような木を切り倒し始める。てっぺんの柔らかい1mほどの芯をとり、細かくきって、これまた近くで切った竹筒につめ、水と塩で煮る。持ってきたご飯や、イワシのかんづめと食べる。

おいしい。

「伐採とたたかってブロッケードした時も、こうやって食事をしたもんだ」

Aちゃんが私の足元を指さしてなにか言う。小さなさそりだ。誰かがつぶしてしまう。

彼女は小川でタニシもみつける。煮てたべるとても美味な貝だ。

「ちいさな失敗」

日本人のひとりが、二人の子に紙風船をあげた。ひとしきり、打ち合いをして、子供たちは大喜び。ところが後で、もう一人の子が自分もほしい」となきべそをかきだした。

しかし、もう紙風船はない。女の子が私のところへやってきて、「あの子にもやってくれ」という。ことばがわからなくても、言いたいことは十分わかる。

が、私も紙風船やそれに替わるプレゼントは持っていない。「みんなで一緒に使ったら？」と伝えることもできない。黙っているしかなかった。

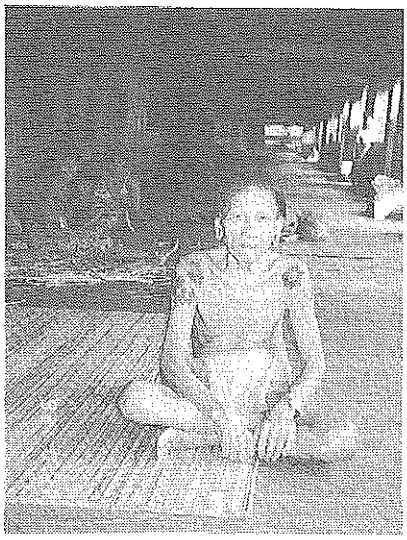
中の人間関係が良くわからないので、このことが子供自身やその親に、どういう印象をあたえたかは不明だ。

実は、私も同じ失敗をするところだった。

「お世話になるところへ」と、こまこましたものをリュックに詰め込んだのだ。が、念のためSさんに問い合わせたところ、「村人全員にわたるだけ用意するのでなければ、やめたほうがいい。泊めてもらうときのルールとして、食料品を持っていくので、ことさらミヤゲの心配はしないでいい」といわれた。

外部の者のプレゼントが、そのコミュニティの人間関係をまずくする、という話はいろいろなところで聞く。今回は「ささいなこと」で済んだ。

が、これからサラワクを（ほかの地域でも）訪れる人は、モノやお金をあげることには慎重であってほしい。



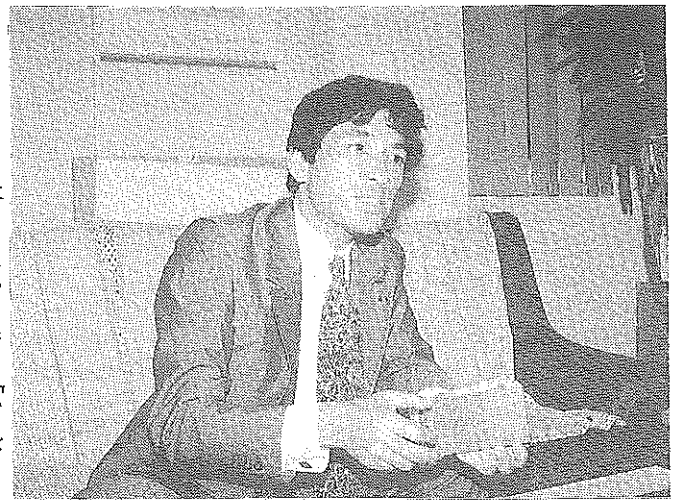
（写真）トゥアロマ・サギンの長老

寄稿

SAVE THE TROPICAL FORESTS

"ストップ・ザ自然破壊をコンセプトに、熱帯雨林保護に役立つ企業経営を考えています"

◆大阪 堺・泉ヶ丘ロータリークラブ 谷川 宏◆



▶自社オフィスでの谷川宏さん

「地球の温暖化、オゾン層の破壊、熱帯林の減少、酸性雨など地球規模の環境問題は、私達の仕事に一番かかわりが深く、真剣に考えなくてはならない問題です。

日本は世界でも有数の森林国ですが、ニーズの多様化により海外に木材資源を求め世界中（特に東南アジア）の森林を伐採してきました。

その結果今では現地の人々の生活を脅かし、森林の生態系も破壊し森林面積が急速に減少してしまいました。

木のぬくもりを知る日本人で有るがゆえ、地球規模で環境保護（熱帯雨林保護）を常に考え、持続可能な収量を守らなければなりません。

そこに携わる関係者が自然環境への意識を高め自然との共存を考え直し、母なる地球から緑の消失を防ぎ、守っていく心が今、必要です。」

この文章は今年、私の会社【注1】で作ったパンフレットの表紙に掲載したものです。

ボランティア活動に参加されている方あるいは常に興味をもってこの「森の通信・ウータン」を読まれている方にとっては、何のインパクトもないものでしょう。

しかし実際に合板の輸入に携わっている人々には相当なインパクトを与えました。

辛辣な批評と感じられたのです。

そして、コンクリート・パネルを実際に購入して使用している大工さん達は、読もうともされませんし、読まれても、自分たちには関係がないといった体です。

この人たちは日本における熱帯材の言わば入口と出口に位置されています。

おわかりでしょうか？

何故熱帯材のコンパネが減らないのでしょうか？【注2】

また、新聞紙上を賑わしているゼネコン関連汚職、ゼネコン各社の方は賄賂を常に否定されます。(公には)そして、熱帯材使用削減案を発表されています。

ある地方自治体のトップの方は賄賂の授受を否定されています。

そして熱帯材使用削減案を発表されています。

どこか似ていませんか?

今、日本の経済は戦後最悪の不況下にあります。

遅れて不況の波をかぶる建設業界は深刻です。

ですから、環境保全の大切さは理解されていても、行動に移れないのです。

最近、次々と新聞紙上に発表されたコンパネの代替技術は、有力な感るいは有効な代替技術が開発されたとみるよりも、本格的な技術開発がスタートしたと理解すべきものです。

今、発表されている製品の利点は熱帯材の使用削減になるということです。

しかし、総じて欠点は高価だということです。

さっと数年のうちに代替技術が開発されることでしょう。

それまで待てますか?

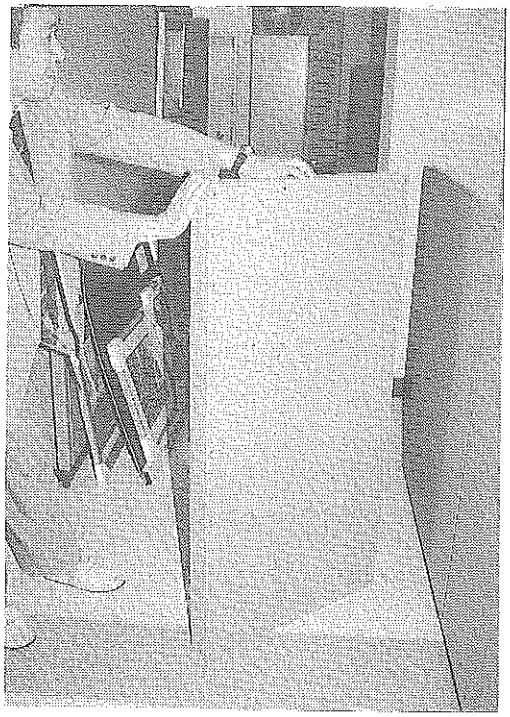
一度消滅した森林に簡単には元に戻りません。

産業界に力がない今、できることは国、あるいは地方自治体が予算をとって熱帯産コンパネ使用禁止を打ち出すことだと考えます。

私は、フリーライター坂本良五さんよりいただいた手紙の最後にあった一文「地球に健全な企業活動に期待しております。」を常に考え、努力していきたいと思います。

【注1】㈱パネル工業、100%米松を使った針葉樹合板を取扱っておられます。表面加工と裏面も耐水にすぐれています。又、米松も環境をそこなわないところの材を使用している。谷川さんはこの会社の代表である。

【注2】コンパネ=コンクリートパネルの略、コンクリートを流し込むための型枠材。



▲パネル工業の製品であるコンパネ.

連載 (4)

熱帯林を考える

多雨林の内部

徳島県熱帯林問題研究会・猪俣栄一

「平地多雨林の林内相観」

前回までは多雨林を外側から見て来ました。今回は、多雨林の内部へ入ってみることにしましょう。まず平地多雨林です。

東南アジア、特によく発達したインドネシアのボルネオ島の平地多雨林の中に足をふみ入れて、まず感じることは、想像していた程、巨樹巨木は多くなく、案外細い木がたくさんあるなということです。それともう一つ、ツル植物が大変多く、ツタ、カズラというと判り易いと思いますが、たくさんのカズラがぶら下がっている光景が目に入ります。

私の住んでいる四国の東南部は、スギの人工林が八〇％を越えるような町村が多いのですが、それでも谷沿い等の広葉樹林が残っているところへ行きますと、大小さまざまなカズラが目につきます。ですから、数のうえではそんなにびっくりはしないのですが、多雨林の場合、そのカズラが太いのと、巻きついている形が異様な景観を呈しています。

そして、私が不思議に思うことが一つあります。それは、熱帯林について書かれた書物は多数ありますが、林内相観については、極端に相反する記述が目立つことです。つまり、多雨林の林内は「樹冠が鬱閉しているために光が届かず、低木や林床植物が少なくて、林内の見通しは非常によく、従って林内は歩きやすい」と書かれている本と、逆に「林内は低木や草本が繁って、見通しは非常に悪く、鋭利な山刀で蔓や低木の林を切り払わなければ一歩も進めず、一キロメートル進むのに半日もかかった」という類いの、全く正反対の記述に出会うことがあります。一体どちらが本当なのでしょうか。

私の体験から言うと、両方とも本当だろうと思います。では何故このように正反対な記述になるのかというと、それはその人達の知見の範囲が狭く、自分が見た範囲の林内相観で、多雨林全体像を推し測っているからだと思います。

例えば同じフィリピンの多雨林でもルソン島の中部から北部にかけてと、ミンダナオ島の中・南部とではかなり様子が違いますし、パラワン島のような島嶼部でもまた違います。スマトラ島の中・南部の湿地林に近い部分と、東カリマンタンの川から離れたところでも異なりますし、ニューギニアの低山地では全く様相が違います。アフリのカメルーンあたりと、アマゾン河流域とでは、樹種そのものが違いますか

ら、相観も変わって来ます。

しかし、本連載で取り上げているボルネオ島の低地林で言えば、林床は、日本の南西部、つまり四国や九州あたりの僅かに残された常緑広葉樹林の中よりは、通り易いといってよいでしょう。実際、温帯の照葉樹林の中ぐらい通り難いところはありません。もっとも、日本の照葉樹林は一〇〇％近く二次林ですから、本当の意味での原生林であれば、案外通り易いのかも知れませんが……。

ただ、誤解のないようにつけ加えておきますと、ボルネオあたりの低地多雨林内には、温帯の照葉樹林内（二次林）に近いほど直径の細い後継木（多種類の）がいっぱい生えています。つまり北米で見られるセコイヤやダグラスファーの成木樹林（天然林）や、高知の魚梁瀬とか屋久島のスギ純林の林床等とは全く異なります。

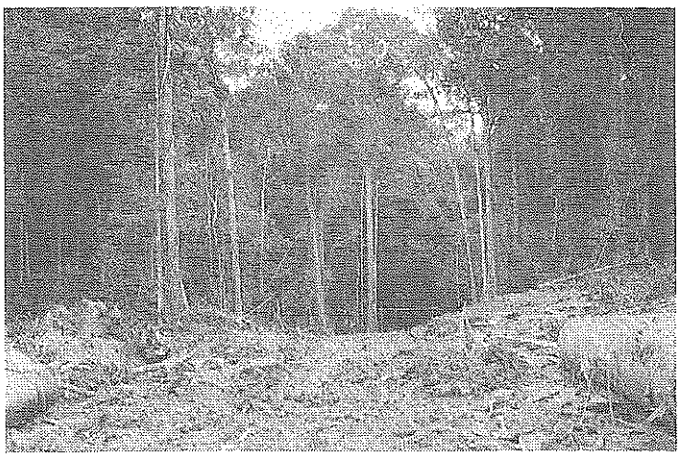
従って、林内の見通しは決してよくありません。だが、歩けないかというと決してそうではなく、前に書いた温帯の照葉樹林内よりは、はるかに歩き易いのです。（写真1）

これは矛盾しているようですが、実は、樹木の形が違うのです。温帯の照葉樹は小さい時から枝分れをして横に伸び、従って低いところにも枝や葉がいっぱい茂っています。これに対して多雨林では、僅か手首くらいの細い木でも高さが一〇メートルもあって、しかも一番先端部にだけ枝と葉があって、地上七、八メートルの幹の部分は全く枝もなければ葉もなく、スラリと伸びている樹形が多いからです。

ただし、このような林内相観は、私の知見の範囲内で言えば、もうなくなってしまったフィリピン（特にルソン島中北部）とか、東部・南部カリマンタンのような主としてショレア属、パラショレア属といったフタバガキ科の大径高木が優占している地域に多く見られ、ウォーレス線を東に越えた地域では、大径高木が少なくなって、逆に最下層の小径低木が増加し、林床は混みあってくる感じがします。

また、林床がすいている林分でも、局所的強風、落雷、自然枯死等で樹冠の大きな高木が倒れますと、まわりの中木以下を巻き添えにすることもあって、ある程度の面積のギャップが生じます。

そのような場所では、それこそ早い



（写真1）カリマンタン・マハカム川中流域『代採最前線で見た原生多雨林の林内相観』（まっくらで見通しは極めて悪い。しかし、林内へ入ってみると、案外通りやすい。）

者勝ちとでも言いましょうが、スラリとしていた小径木間の激烈な伸長競争になると同時に、林床にも実生苗や草本が一斉に出て来ます。しかしそれも一時期的なもので、後継木が大きくなったり、まわりの高木が枝を伸ばしたりして鬱閉率が高くなってくると、短い年数でまた元のような様相に戻ってしまいます。

さらに、原始的なジャングルだと思っていても、近い過去に一度道路をつけたり、小規模でも焼畑をやったりしたような場所に隣接した所や、河のそば等では余分な光量が入ったために思いがけない低木樹種や草本が茂っていたりします。そしてまた、そういう場所からの方が森林写真が撮り易いので、極めて見通しの悪い林内写真や林床が混みあっている写真等が掲載されている場合は、撮影者の立っている位置がどんな条件のところだろうかというようなことまで気をつけて見るようになると、熱帯林に対する興味や関心もまた変わってくることでしょう。

〔多雨林の林床景観〕

以上で、だいたい多雨林内の相観が想像して頂けたでしょうか。

多雨林内に足をふみ入れて、もう一つ気づくことは、足でふんでいる土の感触が違うことです。温帯の落葉広葉樹林（ブナ林とか、もっと低地のコナラ、クヌギ林）に入って気づくことは、土がとてもフカフカして柔らかいことです。また照葉樹林（シイ、カシ、タブ、ヤブツバキ等）に入っても、ブナ林程ではないにせよ落葉が堆積して柔らかいし、場合によっては硬い落葉が腐るまでに、カビ類でくっつき、五センチとか十センチとかの厚い層状に固まっていることがあります。

ところが多雨林の林床は、硬い土の感じが直接足の裏やひざに伝わって来ます。試みに土の上の落葉を枝の先で掻いてみますと、落葉の層の厚さはほんの一、二センチ、甚だしい場合は二、三枚が重なっているだけで、すぐ下が硬い土になっているというケースが多いのです。その土も灰色がかった土がよく見受けられます。（写真2）

これはどういうことかというと、詳しいことは後で土壌特性のところで述べますが、リター（落葉や小枝）層の分解速度がおそろしく速いということなのです。中緯度の温帯（例えば日本

『多雨林の林床』
（多雨林の落葉の層は、信じ難いほど薄い。林床植物は木本類の稚苗で、草本類がほとんど見られない。）
（写真2）

の関東以西から九州ぐらい）の落葉樹では、年間の腐蝕率が約五〇％から四〇％ぐらいといわれています。

つまり地上に落ちた葉は、二年か二年半で分解するということですが、落葉は毎年発生しますから、林床の落葉の層はだんだん厚くなって行きます。これがF層とかA₀層とか呼ばれる土壌の層で、少々の斜面であっても、表層土が雨水等で流亡するのを防ぎ、また森林自体の保水力を高めているのです。

ところが熱帯林、特に多雨林は一年を通じて高温多湿の世界ですから、落葉や落ち枝の腐蝕の速度は、温帯と較べものにならない程速いのです。カリマンタンのある林区で調査した人の話では、腐蝕率が二〇〇％ぐらいだということでした。つまり、半年で分解されてしまうのです。従って落葉の層の厚さが、先程述べたように極めて薄いのです。靴の先で一、二度落葉をかきわけると、もう硬い土の層が出て来ます。

そういうところへ大雨が毎日数回降るのですから、表層の腐蝕層はどんどん流されて行き、土地は痩せる一方で、その割には大容量の樹木を育てているのですから、多雨林の土壌は信じられないくらい養分が少ないのです。

あとで述べますが、そのように条件が悪い中で、辛うじて生態系のバランスが維持されている熱帯林で、生態系外の存在である人間が電機械や大型チェンソーを持ち込み、森林環境に対して何の遠慮も配慮も無く乱伐した場合、元に戻すのがほとんど不可能に近い程困難であるということは理解して頂けると思います。

［多雨林内の植物］

多雨林の樹種はべらぼうに多いということは前号に書きました。そして、天然に種子から育って来た若木は、林内の光量が足りないこともあって、非常にヒョロリと伸びていることも先程書きました。

こういう林内の様子を見ていると、胸高直径が二メートルを越え、高さが約六〇メートル以上にもなる巨大高木がどうやって育って行くのだろうかと不思議な気分になります。

多雨林の林床を見ていて気づくことは、大型の果実がいっぱい落ちているです。熱帯アジアの多雨林では、マンゴーに代表されるウルシ科やドリアンで有名なパンヤ科をはじめ、大型の果実をつける樹木が多数あって、結実期（だいたいが乾期の終わり）に林内に入ると、大きな果実が林床にゴロゴロところがっています。

カリマンタンでは、案内してくれた作業管理者に「林内は危険だからヘルメットをかぶれ」と注意されて、近くで伐採でもやっているのかなと思っていると、そうでなく、かなり大きく重い果実が降ってくるのです。一度だけでしたが、うつむいてメランティの実生苗の写真を撮っていた時に背中に小型のソフトボールぐらいの果実が降って来て、「ウッ…」と言ったきり、息が止まる程のショックを受けたことがありましたし、ヤツコソウの仲間をみつけて写真をとろうとしていた時には、装着していたマクロレンズの先端に命中し、難儀したこともありました。

しかし林床を見て歩くと、こういう大型の果実（種子はマンゴーのように単数のものから、ドリアンやマンゴスチンのように多数のものまで多様である）は、発芽している方が稀で、たいていはカビがはえて黒く腐っています。

しかし林床を見て歩くと、こういう大型の果実（種子はマンゴーのように単数のものから、ドリアンやマンゴスチンのように多数のものまで多様である）は、発芽している方が稀で、たいていはカビがはえて黒く腐っています。

種子によっては、けものや鳥に食べられて、一度体内を通って排せつされないと発芽しないという厄介な種類もあるらしく、そうなってくると伐採時のチェンソーやブルドーザーの騒音で、鳥・けものが近づかなくなると、森林自体は残っても、そこにおける動物と植物の補完的営みは阻害される訳で、人間のやることなすことは、すべて熱帯林には有害のように考えられます。

よく発達した多雨林の林床で、もっとも特徴的なことは、驚くほど草本類が少ないことです。温帯でも、小、中径木がビッシリと生えている常緑二次林では、光量が不足していて林床にほとんど草本を見かけないこともありますが、多雨林のように数十メートルという大高木の林冠の林床で、草本類がほとんど見られないというのは、やはり奇異な感じがします。

多雨林では、高度によっても異なりますが、樹上着生植物が多く、ラン科やシダ植物が着生しているのをよく見かけます。にもかかわらず、林床には地生のラン科植物やシダ植物がたいへん少ないのです。

また、キノコ類も種類の多さということは別にして、個体数の密度からいうと、温帯林の梅雨時や秋の方がはるかに多いのではないかという気がします。そういった点のメカニズムの研究も、まだこれから始まるというのが実情ではないでしょうか。

（つづく）

INFORMATION

【ウータン GOODS】物品紹介

「こんなん ありまっせ！」

◆カード（5枚 三〇〇円）
・表紙イラスト：永田健一氏作品

◆Tシャツ
・森英二郎さん版画の5色刷です
（半袖 二五〇〇円
長袖 二八〇〇円）

◆パネル（送料別）
・「サラワク編」（15枚）（2セット有）
1回貸出 四〇〇〇円
・「アマゾン」編（15枚）
1回貸出 四〇〇〇円

◆スライド
・「熱帯林を守れ！サラワク編」
・50枚セット（説明文有）・貸出 四〇〇〇円（送料別）

◆ビデオ貸出（送料別）各1回貸出三〇〇〇円
・「サラワクの先住民がピンチや」
・「サラワクの先住民カヤン・ウマパワン村の暮らし」
・「かい馴らされたインドネシア・カリマンタン」など

【紹介】PARC・VIDEO 必見！

ビデオ販売「緑の砂漠」¥6000（28分）
―植林が環境を破壊する―
製作・FASE/IBASE

ブラジルでパルプ用のユーカリを植えたために、先住民らが土地を奪われ、環境破壊がされている！

＊販売問い合わせは

太平洋アジア資料センター（PARC）
東京都千代田区神田神保町1-30 正光ビル402
03-3291-5901 FAX 03-3292-2437

ウータンに届いたカンパ・会費・お便り

いつもおおきに

THANK YOU!

【プナン基金ありがとうございました！】

プナン人の危機をすくおう！　との呼びかけにこたえて、毎日のようにカンパが振り込まれ、あるいは、手渡されました。

報告のとおり、非道な逮捕が行われました。「薬や食料に」とお願いした基金ですが、現地の状況により、裁判など別の用途に使わせていただくことになるかもしれません。まだプールしておりますので、もし、「当初の目的以外はこまる」という方がおられましたらウータン会計の井下までご連絡ください。

TEL06-841-8221（夜間）

【氏名】（敬称略）石上リカ、市崎英二、伊東万千子、伊藤初美、一鷹要市、稲垣三千穂、上田真弓、梅尾文子、牛田等、おおまきちまき、加賀瀬みどり、五味義明、康由美、佐瀬知子、下山久美子、寺田武彦、富崎正人、熱帯林行動ネットワーク愛媛、永田展雄、永田博子、中野能行（幼い難民を考える会）、西村和則、原田富生、深町加代子、藤村はるえ、巻田恵子、増田一眞・薫、松本剛一、宮内寿子、三澤文子、水野武夫、明周正和、森一女、森谷将、山田光一、由良行基周、横田憲一、

十月十七日の「森の鼓動」会場カンパ七二〇二円もあわせて、二一万七一九二円集まりました。（7月に会員の辻村さんが預かって、直接サラワクに持参したカンパ分は含まれません）本当にありがとうございました。今後も、色々な動きがあることと思いますが、よろしくお願いします。

「メッセージ」

＊私も「アジア子ども基金」で子どもの人権を守るために、がんばっています。（後略）　稲垣三千穂

＊…生協に積み立ててあったヘソクリなのですが（中略）こんなことしか協力できなくて本当に残念です。　加賀瀬みどり

＊年金ぐらし、十分なカンパもできかねますがみなさんのご健闘を祈り寸志のみ。「ガンバレ！ウータン」　永田展雄

＊世の中に不条理なことが多すぎると又々怒っています。少しですが、役に立てればと思います。　永田博子

【「森の鼓動」賛同金をいただいた方】

池田良二、梅尾文子、奥村知亜子、菊池明子、中野万里子、西岡良夫、原田恵子、橋本美智子、藤村はるえ、山田光一、井下祥子、

【会費】をいただいた方

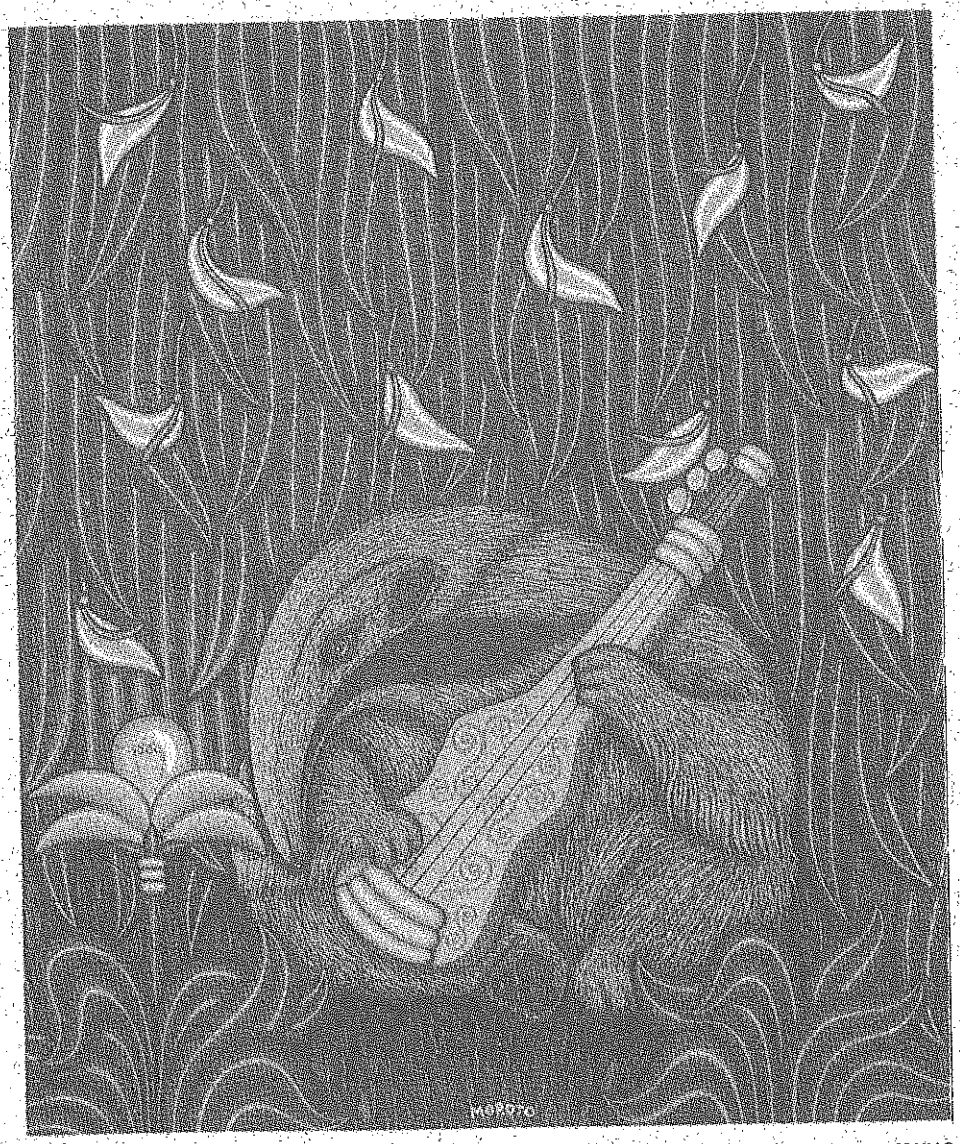
飯高輝、西村和則、宮内寿子、森谷将、米沢興治、吉井玲子、谷口繁子、木村久吉、篠宮早苗、

＊コンパネへの考え方が少しづつ良い方向に…。堺市も市の建築が増えますから、その都度チェックしていきましょう。　吉井玲子

ウータン・アート・ギャラリー
HUTAN ART GALLERY
9

諸戸美和子 MIWAKO MOROTO

● 2回目の登場となる諸戸さんの作品です。
本紙ではモノクロですが原画はとてもきれいな色で描かれております。
忙しい忙しいと言いながら年に1度はインド、ネパール、モンゴルなどの旅へ出掛けている人です。
いたって明るい大阪在住のイラストレーターでございます。



(1993)・CANVAS・F8・ACRYLIC

★この作品は(ハガキで)2枚セットでウータンにて販売しております。1セット300円(送料72円)。

SAVE THE TROPICAL FORESTS

HUTAN ACTION SCHEDULE

1月23日(日) ウータン総会

P1:30～　於：大阪市立中央青年センター
☎06(943)5021

・自治体キャンペーン　・例会、講座の取組み
・サラワク等の現状と今後のあり方　・予算案
・ウータンの今後の活動　など

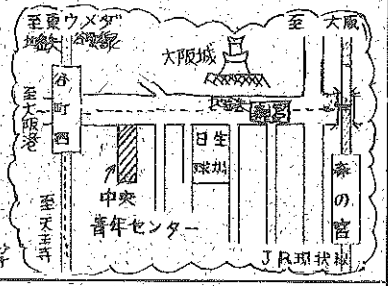
3月 12日(土)
20日(日)
26日(土)
4月 2日(土)

恒例の『炭焼き』に行こう

南河内・水と緑の会主催

【場所】南河内郡河南町持尾　【参加費】500円
【集合】近鉄・富田林駅東出口にAm9:00
【連絡先】0729-54-5553 平尾さん
0721-29-7894 笠原さん(ウータン)
【持ち物】弁当、水筒、軍手、タオル、おわん、雨具、長グツ等

雨天時は、AM7:30にTel



「ウータンから」

●前号の「ウータン・スケジュール」でインドネシア先住民の報告会を、大阪市近辺の人だけしか連絡できません事を皆さんに深くおわびする次第です。経費上の点もありましたが、通信等で今後はもっと早く皆さんに連絡いたします。

●『ウータン』No27号でお知らせしました年会費は、郵便料金の値上げ等の理由で、三千円に値上げ(94年度から)させて頂きたいのです。

といいますのは、91年度、92年度の収支を参考に、93年度収支予算をたてましたところ、会報発送にかかる支出が全会費収入見積りを10万円近く上まわっていたからです。これは会費収金の怠慢と、『自治体キャンペーン』や広報等で、自治体や議員、マスコミ等への通信費がかかったことによります。

今年1月の「ウータン総会」で会員の方からも提案があり、94年度から値上げとふみ切った訳です。スンマヘン、スンマヘン！

●会員の皆さんへ――93年度会費未納の方は、誠に恐縮ですが、「振込」等宜しくお願いいたします。財源難のピンチを救って下さい。たのんま～す！

(西岡良夫)

編集後記

HUTAN

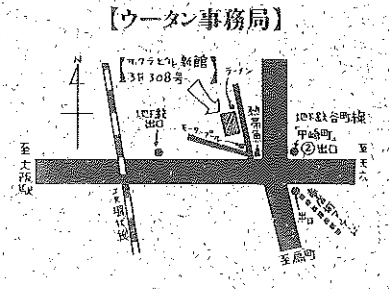
●最後もずんまへーん！」コーナー「いつウータン出るの？」との声にもかかわらず、今号会報発行は特に遅れてスンマヘーン！　その分、今号は増頁です。

●「自治体キャンペーン」や、さあ熱帯林週間や全国会議、インドネシア先住民来阪やと、バタバタしてる内に、今年もあと数日となりました。心して、風邪を来年に持ちこみそうです。皆さんも体にご注意して、良い年をお迎え下さい。　来年もよろしくお願いします。

Y

スタッフ大募集！カンパおねがい！

【ウータン事務局】



●ウータン定例会は、第2と第4火曜日午後7時半から「関西市民連合」事務所(上記地図)にて行っております。TEL・06(372)1561まで。

本誌は再生紙を使用しています。